

『西塞山懷古』 劉禹錫

西塞山懷古 劉禹錫

西晋樓船下益州
金陵王氣漠然收
千尋鐵鎖沈江底
一片降旗出石頭
人世幾回傷往時
山形依舊枕寒流
今逢四海為家日
故壘蕭蕭蘆荻秋

西晋の樓船益州より下る
金陵の王氣漠然として収まる
千尋の鉄鎖江底に沈み
一片の降旗石頭より出ず
人世幾回か往時を傷む
山形旧に依つて寒流に枕す
今四海を家と為す日に逢い
故壘蕭蕭たり蘆荻の秋

【語句の意味】

西塞山 ①呉の都・金陵の西にある塞

②湖北省武昌（武漢の一部）の東にあり 長江に
臨む古戦場

③浙江省呉巧賢の西南に在る の三説がある
西 晋 三国時代の終わってから東晋までの国名（265～316）
益 州 今の四川省成都 三国時代蜀の都 当時王濬はこの地の長官で西晋の援軍を命ぜられた
金 陵 今の江蘇省南京 三国時代呉の都
王 氣 王者を出す兆しのある感じ 王者の雰囲気
千 尋 山や谷が非常に高くまた深いこと ここでは鎖が長い
降 旗 旗を降ろすこと 降参した時の合図の白旗
石 頭 金陵の西にある城 三国時代呉の孫権が築いた
依 旧 昔からのありさまで変わらない
四 海 四方の海 ここでは天下
故 壘 古いとりで ここでは西塞山の塞

【詩の意味】

（約520年前に）望樓の聳える西晋の軍船が益州より長江を下っておしよせて来て、呉の都・金陵を覆っていた王者の雰囲気はぼんやりとうすれ消えてしまった。

（呉は西晋軍を率いる王濬の水軍を防ごうとして）長江に長い鉄の鎖を張り渡したが、焼き切られて流れの底に沈んでしまい、呉の降伏を告げる一振りの旗が石頭城に掲げられたのであった。

人世には幾度となく心を傷める昔の出来事があったが、

西塞山の形だけは昔と変わらず、寒々とした流れにその影を映している。

今や天下を一つとする（唐という）世にあつて、かつての塞の跡には蘆や荻がもの寂しく茂るばかりの秋である。

□まずは作者の経歴を知っておこう。

中唐の役人・詩人。河北省定県の人。793年（21歳）進士に合格した秀才である。本庁役人として順宗のもとで高官・王叔文らの国政改革に参加するが途中で頓挫して、33歳で湖南省の朗州の司馬に貶謫された。10年後に長安に戻るが、まもなく広東省の連州の司馬に転出された。49歳の時には安徽省の和州の司馬となり、さらに10年後には江蘇省の蘇州の司馬を命ぜられ、やっと64歳になって長安に召還され、高官に就いた。文名高く、韓愈・柳宗元・白居易らと交遊があつた。841年（69歳）で検校礼部尚書という名誉職を授けられたが71歳で永眠した。晩年太子の賓客を任じられたので劉賓客とも呼ばれ、「劉賓客文集」がある。なお白居易との交遊については「吟詩日本」191号の「悠久の名詩」欄に詳しい。絶句「秋風引」はことに有名。

□この詩の時代背景

この詩は3世紀の後半、いわゆる三国時代の末期、すでに蜀と魏が滅んで、残る呉が新興国の晋に滅ぼされようと

するころの史話をもとにしている。

263 蜀が魏によって滅ぼされる

265 司馬炎が魏を滅ぼして晋を建国 歴史上西晋と

呼ぶ 都は洛陽

280 西晋の武將王濬の活躍で呉を滅ぼし中国を約60

年ぶりに統一

316 西晋時代終わる

□この詩に残る2つの疑問

この詩は「全唐詩」「唐詩三百首」に収められているが、書によって語句の異同がいくつか見られ、いずれが正確なのか不明であるが今は触れないでおく。それでも一読しての疑問点が2つある。一つは西塞山の位置である。【語句の意味】にあるように3説があり思案に暮れる。③の湖北省説を採ると、呉軍の降参を示す旗が金陵に上がったとあるが、湖北省の武昌からゆうに500kmは離れている。將軍や兵士たちの目には入らない。王濬はその後金陵に向かったという書を読んだが、それでも5日ほどを要するだろう。そこで旗を見たというのでは少し間が抜けている。一方、作者が50代後半にこの蘇州に赴任していることを見ると、そこから金陵は近い。實際現地を訪れた時の作と考えられる。さらに「中国名詩鑑賞辞典」（『角川書店』）を見ると「西塞山が武昌付近とするのは誤りである」と断言している。以

上のことから、①の西塞山は金陵の近くに在るといふ説が納得しやすい。いずれにしても国の興亡があったのだから中国では有名な古戦場であることは間違いない。

もう一つは三句の鉄の鎖が沈んだ話。金陵（今の南京）近くでは長江の川幅は10kmは下らないと思われる。その川に当時の技術で軍船を阻む重厚強大な鎖を作ったというが、今でも並みの作業ではない。さらに晋軍がそれを焼き切ったという、いずれの方法も想像しがたい。

□ 3つの題名を持つ

①「西塞懷古」…西塞山という山の存在を疑問視する説で、「西塞」とは単に呉の都である金陵城の西に在る塞というもの。

②「金陵懷古」…この詩の場所は湖北省でなくて金陵近くの古戦場に違いなく、そこに西塞山という名称があったというもの

③「西塞山懷古」…西塞山と言えば湖北省のものが有名らしい 本会の場合

【鑑賞】

単なる古戦場懷古で終わってよいのか。

作者の時代からすれば約520年以前の出来事だからその

ころの資料をもとに作られたことは間違いない。王濬將軍の人物をもっと知りたいがそれは今は置いて、一つの国家を滅ぼすというのだからそうとう大がかりな戦が展開されたと思う。前半四句では「樓船」「王氣」「千尋鉄鎖」などから、その様子を髣髴とさせる勢いが感じられる。後半は懷古詩によくあるように、人の世は変わっても自然の姿は昔のままであると繋いでいて、やや平凡であるが、最後の二句まで来ると、待てよこの詩は単なる懷古詩で終われない何かがあると感じられる。なぜなら、作者は古戦場を眺めながら今自分が暮らす長期国家である唐王朝に思いが及んだからである。これは何だろう。そしてそのことが提示されたまま、再度視線は古戦場に移り、さみしく萩や蘆が生い茂っていると結んでいる。唐王朝が成立してからかれこれ200年になる。中国史上でも最も安泰した大国家である唐王朝であるが、最近ひび割れが始めたのも事実である。安祿山の戦いで勝利したものの、その後皇帝の権威は衰え、外敵民族の侵入も断続的に続いている。作者にしてみればこの一家のような盤石な帝国も、あるいは呉が滅びたように、形もなくなる日が来るかもしれない。そんな漠然とした不安がよぎったのではないか。前半の勢いに対して最後は暗い。とりわけ「蕭蕭」の二文字がそんな鑑賞をさせないだろうか。

【参 考】

白旗が掲げられた石頭城の詩を紹介する。

石頭城 劉禹錫

山圍故國周遭在
潮打空城寂莫回
淮水東邊旧時月
夜深還過女牆來

山は故國を圍んで周遭として在り
潮は空城を打ちて寂莫として回る
淮水 東邊 旧時月
夜深くして還た女牆を過ぎて來たる

山山はかつての都・金陵の町をぐるりと取り巻いて、いかにも要害堅固なたたずまいである。

長江の潮はこの人けのない石頭城にぶつかって寂しく引いていく。

淮水の東あたりからは昔のままの月が現れ、夜も深まっていくと、姫垣（城壁の上の背丈の低い垣根）を越えてその月光が射し込んで来る。（月光は昔のままだが、人の世はいろんな変化があった）